

Title	子どもと哲学, ノーラ・ K./ヴィットリオ・ ヘスレ, 「哲学者のカフェ」, 浅見昇吾訳
Sub Title	Children and philosophy, "The cafe of philosophers", Nora K. and Vittorio Hosle, translated by Shogo Asami
Author	浅見, 昇吾(Asami, Shogo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1999
Jtitle	哲學 No.104 (1999. 12) ,p.71- 75
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	訳書紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000104-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 訳 書 紹 介 —

子どもと哲学

ノーラ・K./ヴィットリオ・ヘスレ「哲学者のカフェ」

浅見昇吾訳，河出書房新社，1999年。

— 浅 見 昇 吾*

最近，子どもと哲学のことがよく話題になる。このテーマに関連した著作も登場してきている。日本だけではない。欧米でも，子どもと哲学，あるいは子どもの哲学という問題に強い関心が注がれている。というより，やはり先鞭をつけたのは，欧米だと言えよう。大人の読者が多かったとはいえ，ヨースタイン・ゴルデルのベストセラー『ソフィーの世界』も，子どもの哲学を扱ったものである。その他にも，子どもの哲学を扱った著作や論文が幾つも存在している。アメリカでは，子どもの哲学を専門的に扱った雑誌すら発行されている（“The Journal of Philosophy for Children”）。

『哲学者のカフェ』（訳書1999年，原書1997年刊行）も，こうした気運の高まりの中で，ドイツで出版されたものである。しかし，数多くの書物の中で，この作品はひととき異彩を放っている。なぜだろうか？ ノンフィクションだからである。哲学者と少女の実際の文通が収められている。しかも，公刊されることを前提に交わされた書簡ではない。少女がふだん感じている疑問，現実の生活の中で出てきた疑問を率直にぶつけていく。哲学者もそれに真正面から答え，わかりやすく誠実に対応したうえで，新たな刺激的な問題へと少女を導いている。一方的に過去の哲学の学説を並べるようなことはしない。少女が自分で考え，自分で答えを出す手助けをする。ふつうの作品とは大分趣を異にしている。

* 慶應義塾大学文学部非常勤講師

少女の名はノーラ・K. 姓のほうがいニシャルになっているのは、本人の希望による。哲学者と文通を始めたときは、11歳。その後の数年間の書簡が本に収められている。「あとがき」によれば、今でも手紙のやりとりは続いているという。哲学者のほうの名はヴィットリオ・ヘスレ。ドイツの俊英として名高い思想家である。20代の頃からハーバースやアーペルらと渡り合い、現代哲学の最前線で活躍してきている。それだけではない。世界中のいたるところから、講演やセミナーに誘われている。大学だけではない。いろいろな文化機関からも招待されている。これも当然かもしれない。ヘスレはつねに現実に密着した問題意識を失わないように努めている。現代の社会や生活につながらないような哲学は哲学の名に値しないと考えているのである。

人生や社会について感じた疑問を率直に投げかける少女、人生や社会につながらないような哲学を説こうとする哲学者、この二人が織りなす対話は刺激に満ちたものになっている。なるほど、実際の書簡であるから、話の進み方が必ずしも秩序立っていないところはある。しかし、興味深いテーマが次々と言及されていく。翻訳書に付加された小見出しを少し覗くだけで、その豊饒な内容の一端が見えてくるだろう。

夢と現実は区別できるのか？ 子どもにはなぜ哲学が向いているのか？ 人間はロボットか？ 神は死んだのか？ 人間には自由があるのか？ 「真理」はあるのか？ 理性とは何か？ 技術の進歩は世界を滅ぼすのか？ 神と道徳的なものの関係はどのようなものか？ アイデンティティとは何か？ 権力とは何か？ 時間とは何か？ なぜ西欧が無神論と物質主義に傾いたのか？ 懐疑主義の意義は何か？ 近代化を受け入れるべきか？ 言語が思考に影響を与えるのか？ 宇宙は有限か無限か？ 悪はどこから生まれるのか？ 神は万能でなければならないのか？ 哲学は消滅するのか？ 他人や世界は幻なのか？ 人間の使命とは何か？

他にも数多くの主題が取り上げられている。

もちろん、少女が日常生活の報告に交えながら繰り出す質問自体が、これほど明確な形で表現されているわけではない。哲学者が投げかける問いにしても、これほど堅苦しい言い回しでなされているわけではない。だが、具体例に即しながら、上述のような人生と哲学の根本問題が繰り広げられているのは間違いない。

ここで注目しなければならないのは、ヘスレの道具立てである。10代の少女に哲学の学説を並べ立てても、少女の興味をそいでしまうだけだろう。そこで、「死せる哲学者のカフェ」という架空のカフェを創り出すことにする。「死せる哲学者」が集い、様々な対話を交わしていくのである。ヘーゲルとキルケゴールのように時代が近い人間が対話するだけではない。ソクラテス、ガッザリー、ホッブス、パスカル、ヴィトゲンシュタインが熱い議論を戦わることになれば、ツァラトゥストラ、プロティノス、ヤーコプ・ベーム、ライプニッツ、ヘーゲル、ハンス・ヨナスが激しい言葉のやりとりを行うこともある。登場する哲学者は総勢68人。生きているときの時代や場所を越えて、議論が展開していく。すると、一人一人の哲学者の学説を順番に扱うのでは得られない視野が開かれる。古今東西の思想が今という時代の文脈の中で比較され、新たな展望が開かれる。ノーラもヘスレの道具立てに応え、自分自身と哲学者の対話を創り出し始める。少女を哲学の舞台に引き寄せる見事な道具立てだ。

こうして少女と哲学者の間に交わされた会話、そして「死せる哲学者」同士の会話は、読者の知識に応じて様々な姿で現れてくるものになっている。さりげない言葉のやりとりにも見える。が、背景の知識を持っていれば、深い哲学的な対話にも映る。哲学の手引きとしては恰好のものに仕上がっている。

そのうえ、子どもと哲学の問題に関して幾つものことを考えさせてくれる。

例えば、子どもを中立的な立場で導けることができるか、という問題に

対してもヒントを与えてくれている。ヘスレは手紙の中ではっきりと理想主義（客観的観念論）という強い理性主義の立場に立ち、懐疑主義には限定的な役割しか認めていない。ということは、中立的な立場に身を置いて子どもを導くことなど不可能なことを示唆している。事実、その通りではないだろうか。子どもにどの思想家を紹介するかでさえ、個人の選択が働く。説明の仕方にしても、中立的な解説など難しい。かつてヘーゲルが言ったように、他人の意見をまとめるだけでも、個人的な選択の基準が入り込まざるを得ないだろう。大切なのは、どこに向けて子どもを導くのかということになるだろう。

また、何のために子どもと哲学を論じるのかに関しても、いろいろ考えさせてくれる。『哲学者のカフェ』では二つの面が言及されているものの、それをうまく統一できていない。子どもを人生と社会の思索へ導き、自分で思索を巡らせることができるようにさせること。これが当然、子どもの哲学の一つの課題であり、効用である。もう一つは、驚きを忘れ人生への感覚を鈍らせた大人たちが、子どもの素直な感受性に触れ、新たな眼で人生と哲学に立ち向かえるようにすることである。この二つの側面は重なるところも多いが、それでも完全に同じものとは言えないだろう。ヘスレにしても、最後のほうの手紙で告白している。ノーラへの配慮が徐々に薄れてきたのではないかと。もちろん、二つの側面を統一させるのが容易なはずがない。双方の要素が混然としてくるのは仕方がないだろう。だが、「子どものための」子どもの哲学と、「大人のための」子どもの哲学との関係をもう一度よく吟味してみなければならないことは確かだろう。

次に、子どもの成長や思考能力の発展についても、再考を促される。ノーラは豊かな感受性と鋭い分析能力を持ち合わせている。そのため、ヘスレが手紙の中でしばしば言及するように、ノーラという存在、子どもの哲学者という存在を疑う大人が数多く出てくる。子どもがこれほど深く物事を理解できるとは考えられないというのである。確かに、とても10代

前半の少女とは思えないような豊かな思索が垣間見える。疑いたくなるのも無理はないかもしれない。読者も疑おうと思えば、あらゆることを疑える。ノーラ・Kは実在しない。奥付のところの記述も「ノーラのあとがき」も出版社の創作だ。ノンフィクションという本のうたい文句も嘘だ。そういう人は、ノーラが言うように、何を見ても疑うのかもしれない。実際のノーラを見ても疑うのかもしれない。しかし、ノーラの事例を考慮に入れ、子どもの感受性や知性を新たな目で捉え直すことのほうが重要ではないだろうか。ノーラも心理学者にこんな言葉を投げかけている。「大人しかあのような手紙を書けないというのは、間違っていると思います。たくさんの点で、子どもは皆さんより優れています」。子どもの可能性の豊かさ、ノーラはそれを体現している。

さらに、神の問題にあらためて思いを馳せるようになる。ノーラは人生の問題を考えていくとき、つねに神の問題に立ち返っていく。西洋人にとっての神の問題の重さがよく読みとれる。だが、もしそうだとすると、西洋の神が普遍的なものなのか、日本人が人生の意味を考える時どこに根拠を求めるべきなのか、という問題が出てくる。『哲学者のカフェ』はそのための恰好の題材を提供してくれている。

このようにノーラとヘスレの書簡は強い刺激に満ちている。子どもが読んでも大人が読んでも、そして哲学者が読んでも得るものがあるに違いない。

(Nora K./Vittorio Hösle, Das Café der toten Philosophen, C. H. Beck, München, 1997)